

第21講 物語(1)

演習問題 A

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

夕顔の遺児玉鬘は母の死後、乳母のもとにいたが、やがて乳母の夫・少弐(大宰府の次官)の赴任にともなうて筑紫へと下り、そこで成長する。少弐は玉鬘を都へつれて帰ることを夢見ていたが、それをなし得ないまま任地で亡くなる。その死後、美しく成長した玉鬘に言い寄る男たちは多い。そうした経緯を描いた一節である。

少弐、任はてて上りなむとするに、はるけきほどに、ことなる勢ひなき人はたゆたひつつ、すがすがしくも出で立たぬほどに、重き病して、死なむとする心地にも、この君の十ばかりにもなりたまへるさまの、ゆゆしきまでをかしげなるを

見たてまつりて、我さへうち棄てたてまつりて、いかなるさまに放れたまはむとすらむ。あやしき所に生ひ出でたまふも、かたじけなく思ひきこゆれど、いつし

かも京に率てたてまつりて、さるべき人にも知らせたてまつりて、御宿世にまか

せて見たてまつらむにも、都は広き所なれば、いと心やすかるべしと、思ひいそ

ぎつるを、ここながら命たへずなりぬることと、。男子三人あるに、「た

だこの姫君京に率てたてまつるべきことを思へ。わが身の孝をば、な思ひそ」と

なむ言ひおきける。

その人の御子とは館の人にも知らせず、ただ孫のかしづくべきゆゑあるとぞ言ひなしければ、人に見せず、限りなくかしづききこゆるほどに、にはかに亡せぬれば、あはれに心細くて、ただ京の立出をすれど、この少弐の仲あしかりける国の人多くなどして、とぎまかうさまに怖ぢはばかりて、我にもあらで年を過ぐすに、この君ねびととのひたまふままに、母君よりもまさりて清らに、父大臣の筋さへ加はればにや、品高くつくしげなり。心ばせおほどかにあらまほしうものしたまふ。聞き継い一つ、好いたる田舎人ども、心かけ、消息がる、いと多かり。ゆゆしくめざましくおぼゆれば、誰も誰も聞き入れず。

〔源氏物語〕

(注) ことなる勢ひなき人はたゆたひつつ || 格別の勢力のないこの人(少弐)はぐずぐずしていて。

放れたまはむとすらむ || 流浪なさることであろう。

母君 || 夕顔のこと。

父大臣 || 光源氏のよきライバルで、かつての頭中將。今の内大臣。

問一 傍線部①「ゆゆしきまでをかしげなる」、⑤「いと心やすかるべし」、⑥「ねびととのひたまふままに」をそれぞれ現代語訳せよ。

- ① ー
⑤ ー
⑥ ー

問二 傍線部②「我さへうち棄てたてまつりて、いかなるさまに放れたまはむとすらむ」とあるが、どういうことを言っているのか。人物関係を明らかにした上で、状況がよくわかるように説明せよ。

問三 傍線部③「あやしき所」とは、どこのことか、記せ。

問四 傍線部④「さるべき人」とは、どのような人のことか。その内容として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 将来の夫となるべき人
イ 玉鬘の将来を予言してくれる人
ウ 都で待っていてくれる人
エ しかるべき縁故のある人
オ 玉鬘のもとをかつて去って行った人

問五 〇〇に入れるのに最も適切な表現を、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア はづかしがる イ ゆかしがる
ウ うしろめたがる エ つつましがる
オ たのもしがる

問六 二重傍線部A～C「なむ」の文法上最もふさわしい説明はどれか。それぞれ次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。ただし、同じ記号は二度使えない。

- ア 係助詞
イ 終助詞
ウ 完了（強意）の助動詞＋意志の助動詞
エ ナ変動詞の語尾＋推量の助動詞

- A ー
B ー
C ー

問七 本文の内容に合致するものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 少弐は自分の死後の供養をするのだと思つて姫君の面倒を見るようにと、三人の男の子に言い聞かせた。
イ 少弐は地方に住んでいるときにその地方の人々と仲が悪かつたため、三人の男の子たちはつらい目にあつた。
ウ 姫君の美しさは母親よりもまさつていたため、父親の血筋の裏付けが加わればよいのにと人々は残念がつた。
エ 姫君のことを気に入つた田舎の者たちは次々と姫君に手紙を送つたが、それらの求婚はすべて断られた。

- ー
ー

演習問題 B

次の文章は、『源氏物語』御法の巻の一節で、明石の中宮と光源氏が紫の上のもとを訪問する場面が描かれたものである。また、続く【図1】は、十二世紀に作られた『源氏物語絵巻』の一部であり、本文の内容に該当する場面である。【図2】は、【図1】の景物や人物の輪郭を抽出したものである。これらを参照し、後の問に答えよ。

秋待ちつけて、世の中すこし涼しくなりては御心地もいささかさはやくやうなれど、なほともすればかごとがまし。さるは身にしむばかり思さるべき秋風ならねど、露けきをりがちにて過ぐしたまふ。

中宮は参りたまひなんとするを、今しばしは御覽せよとも聞こえまほしう思せども、さかしきやうにもあり、内裏の御使の隙なきもわずらはしければ、さも聞こえたまはぬに、あなたにもえ渡りたまはねば、宮ぞ渡りたまひA。かたはらいたけれど、げに見たてまつらぬもかひなしとて、こなたに御しつらひをこにせさせたまふ。

こよなう痩せ細りたまへれど、かくてこそ、あてになまめかしきことの限りなさもまさりてめでたかりけれど、来し方あまりにほひ多くあざあざとおはせし盛りは、なかなかこの世の花のかをりにもよそへられたまひしを、限りもなくらうたげにをかしげなる御さまにて、いとかりそめに世を思ひたまへる気色、似るものなく心苦しく、すずるにもの悲し。

風すごく吹き出でたる夕暮に、前裁見たまふとて、脇息によりゐたまへるを、院渡りて見たてまつりたまひて、「今日は、いとよく起きゐたまふめるは。この御前にては、こよなく御心もはればしげなめりかし。」と聞こえたまふ。かばかりの隙あるをもうれしと思ひきこえたまへる御気色を見たまふも心苦しく、つひにいかにも思し騒がんと思ふに、あはれなれば、

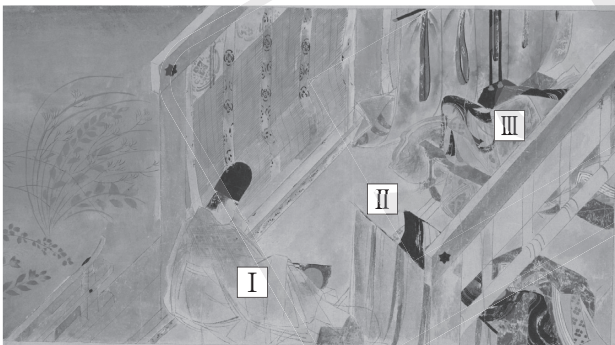
おくと見るほどぞはかなきともすれば風にみだる萩のうは露げにぞ、折れかへりとまるべうもあらぬ、よそへられたるをりさへ忍びがたきを、見出だしたまひても、

ややもせば消えをあらそふ露の世におくれ先だつほど経ずもがなとて、御涙を払ひあへたまはず。宮、

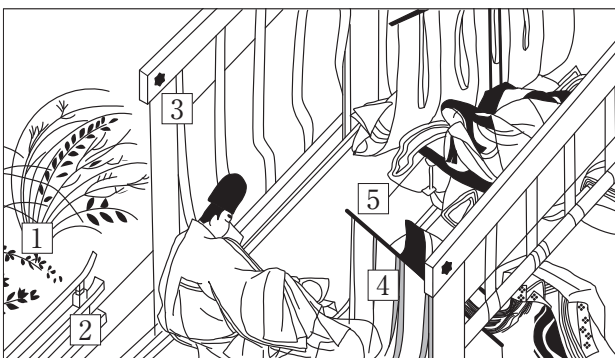
秋風にしばしとまらぬつゆの世をたれか草葉のうへとのみ見んと聞こえかはしたまふ御容貌どもあらまほしく、見るかひあるにつけても、かくて千年を過ぐすわざもがなと思さるれど、心かなはぬことなれば、かけとめん方なきぞ悲しかりける。

「今は渡らせD。乱り心地いと苦しくなりはべりぬ。言ふかひなくなりけるほどといひながら、いとなめげにはべりや」とて、御几帳ひき寄せて臥したまへるさまの、常よりもいと頼もしげなく見えたまへば、「いかに思さるにか」とて、宮は御手をとらへたてまつりて泣く泣く見たてまつりたまふに、まことに消えゆく露の心地して限りに見えたまへば、御誦経の使ども数も知らずたち騒ぎたり。さきさきもかくて生き出でたまふをりにならひたまひて、御物の怪と疑ひたまひて夜一夜さまさまのことをし尽くさせたまへど、かひもなく、明けはつるほどに消えはてたまひぬ。

【注】中宮＝明石の中宮のこと。光源氏と明石の君との娘で、紫の上に育てられ、今上帝の中宮となった。いつもは宮中にいるが、見舞いのため一時的に二条院に滞在している。院＝光源氏のこと。



【図1】



【図2】

問一 A・Dに入る言葉の組み合わせとして最も適切なものを、次の

アくオの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア A けれ D たまはず イ A けり D たまはぬ
ウ A ける D たまへぬ エ A けり D たまひぬ
オ A ける D たまひぬ

問二 傍線部①の解釈として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 紫の上は、気分がすぐれず身体中が痛み、人に会える状態では到底ないが、明石の中宮にお会いしないのも不甲斐ないと、こちらのお部屋に御座所を特別にととのえさせなされる。

イ 明石の中宮は、病み臥せている紫の上を思うと自らの身体も痛むようであるが、それでも会わないわけにはいかないと、こちらのお部屋に御座所を特別にととのえさせなされる。

ウ 光源氏は、紫の上の痛ましい姿を見るのは限りなくつらいことであるが、やはりお会いしたほうがよいであろうと、こちらのお部屋に御座所を特別にととのえさせなされる。

エ 紫の上は、自らの弱り切った姿をお見せするのはお恥ずかしいが、明石の中宮にお目にかからずにはいられないと、こちらのお部屋に御座所を特別にととのえさせなされる。

オ 明石の中宮は、紫の上が自分に会いたがっているのか確信がもてないが、それでもお目にかからぬのも不都合であると、こちらのお部屋に御座所を特別にととのえさせなされる。

問三 傍線部B「前裁」・C「脇息」・E「几帳」が示すものを、それぞれ【図1】～【図5】の中から一つ選び、番号で答えよ。

- B 「 〱 」 C 「 〱 」 E 「 〱 」

問四 【図1】に描かれる人物【I】から【IV】の中で、本文中の傍線部a・b・d・eの動作主およびcの指示する人物に対応する組み合わせとして最も適切なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア a 〱 b 〱 c 〱 d 〱 e 〱
イ a 〱 b 〱 c 〱 d 〱 e 〱
ウ a 〱 b 〱 c 〱 d 〱 e 〱
エ a 〱 b 〱 c 〱 d 〱 e 〱

オ a 〱 b 〱 c 〱 d 〱 e 〱

問五 【図1】に描かれている本文の内容を説明した次のア～オの文の中で、適切ではないものを一つ選び、記号で答えよ。

ア 風がものさびしく吹き始めた夕方に、庭の草花を見ようと身を起す紫の上の対面し、中宮がそばにいると気分が晴れるのであると言葉を掛け、紫の上の小康状態を喜ぶ光源氏の様子が描かれている。

イ かつては色香にあふれて華やかで、この世の花の美しさにもたとえられていたが、今では病み衰えてやせ細り、すっかりやつれて、若かりし頃の優美さが失われた憐れな紫の上の様子が描かれている。

ウ 萩の葉の上に置かれた露が風に吹かれて乱れ落ちるように、今は身を起こしている我が命もすぐに消え去ることだろうと詠む紫の上の歌を反映して、庭の萩が風に吹かれ、しなだれている様子が描かれている。

エ 先を争って消え果てる露にも等しい命であるが、遅れ先立つ間を置かず私たちが一緒に死ねるようでありたいと歌を詠み、袖で涙を押さえ、紫の上を失う悲しみに暮れている光源氏の様子が描かれている。

オ 紫の上と光源氏との間で交わされた贈答歌に対して、秋風に吹かれてほどなく散っていく露に人間のはかない命をなぞらえ、自らの歌を添える明石の中宮の様子が、二人に比して控えめに描かれている。

問六 傍線部②の解釈として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 紫の上は、自分がいよいよ死ぬという時には、光源氏がどんなにかお嘆きになることかと思うとしみじみと悲しいお気持ちになるので。

イ 光源氏は、今こそ小康状態を保っている紫の上がいよいよ亡くなるという時にはどれほどつらいことだろうとお感じになるので。

ウ 明石の中宮は、紫の上がとうとうお亡くなりになる時には、光源氏がどれほど嘆かれるかと思うとうちひしがれた気持ちになるので。

エ 紫の上は、いよいよ自らの命が果てる時には、自分はどれほど思い乱れることだろうと思うと実につらく耐えがたいお気持ちになるので。
オ 光源氏は、健気に振る舞っている紫の上が、自らの死を前にしていかに心が乱れていることだろうと悲しい気持ちになるので。